

ライブラリアンを「使い倒す」

相沢 伸広

学術情報のみならず、社会全体における情報発信の電子化、情報蓄積のオンライン化にともない、現代は歴史ある大学図書館、専門図書館の大転換期にあり、世界中の図書館が現在その存立を賭して、変革をすすめている（ワールドトレンド二〇一四年四月号参照）。

私が研究する東南アジアの政治について、アジ研図書館には他所にない貴重な蔵書が沢山あるのは、インドネシアを専門とする高橋宗生さんや土佐美菜実さん、タイを専門とする石井美千子さんや小林磨理恵さんからサブジェクト・ライブラリアンがあり、目利きとして文献のアップデートを行い続けているからに他ならない。アジ研図書館は主要な言語について、同時期に二人存在する時期を設け、ライブラリアンの専門性の継続・育成に注力している。良い図書館は一朝一夕では成らず、長年の蓄積によって成り立つ。それを現に支えているのが、この専門性の引き継ぎを担保する時期である。図書館の変革期にあつてこの体制を維持する価値は強調してもしきれない。こうした専門性の継続への信頼ゆえに、多くの研究者が寄贈するならばアジ研図書館にしようと思うのであろう。アジ研図書館のもつ優れた専門性の再生産メカニズムが数年単位では測り得ない特別な価値と信用を生んでいることは間違いない。

アジ研図書館の特別性を理解するうえで、ライブラリアンの専門性の継続以上に重要な点がある。私自身、アジ研の研究者としてライブラリアンのみなさんと日常的に接し革新を希求する彼、彼女らの姿勢に接する機会に恵まれた。先に挙げた方々の他にも坂井華奈子さんや狩野修二さん、前嶋淳子さん、村井友子さんからライブラリアンは危機意識をもって伝統維持と図書館機能の進化の両立に注力している。彼・彼女らはリポジトリ構築により、アジ研研究者の成果と読者を積極的につなぐ役割を任じ、数々のオープンリソース、有料データベースの講習会を組織し、革命的に増え続ける学術情報と研究者のインタフェースを広げようと新たな情報収集方法を提案し、研究者にも変化を推奨する。アジ研の伝統的な良さであるサブジェクト・ライブラリアンとしてのプロフェッションナリズムに加え、システム・ライブラリアンとしてそのプロフェッションナリズムを磨いているのである。これは大変なことである。

図書館が収集すべき情報が飛躍的に増加し、情報収集のみならず情報発信までもが図書館の仕事となった。さらに、アジ研の図書館は歴史があるがゆえに継続的な資料統計の収集を死守することも求められる。情報形態とニーズが劇的に変化しているものの、法的には国会図書館や、大学図書館とも少々立場が異なるため、著作

権や寄付金に関する制限など、アジ研図書館をめぐる環境は一般の大学図書館以上に厳しい。海外との競争においても、法的な枷は一組織には解決できない大きな問題である。アジ研図書館はその空間こそ静かだが、裏ではそんな厳しい環境のなかで、熱いチャレンジを行っているライブラリアンが控えた場所なのである。

だからこそ、アジ研図書館を使い倒すには、そんな熱いライブラリアンを使い倒すことに一番の価値がある。所蔵資料について尋ねるのみならず、リサーチ全般について、テーマに沿った情報収集体制の構築方法に至るまで、レベルの高いリサーチ上の助言を求めるのが最高の「使い倒し」になるだろう。

アジ研の図書館は都心から遠くにあつて不便という声も聞こえる。しかし、アジ研はそのただけに旅をする価値がある、いわば「三ツ星」図書館なのである。「三ツ星」図書館を使い倒すには、やはり事前に予約をいれ（アジ研ホームページ <http://www.wide.go.jp/Japanese/Library/index.html> に連絡先あり）、テーマを決めて資料単体だけでなく情報収集のプランニングを含めて相談しに赴くのが最大の活用方法である。そのためには是非ライブラリアンの紹介ページを充実させて頂きたい。アジ研図書館の最大の力であるライブラリアンを尋ねて、海浜幕張を訪れ一日を過ごす。そんな贅沢を心からお勧めする。

（あいざわ のぶひろ／九州大学比較社会文化研究院准教授）